

## 3

## 日本赤十字社における支部選出看護婦 ——京都支部選出看護婦 高木ハルの事例をもとに——

川原由佳里, 鷹野 朋美, 山崎 裕二  
殿城 友紀, 高橋 朋子, 川嶋みどり

日本赤十字看護大学

本研究の目的は、日本赤十字社病院における支部選出看護婦について、卒業生高木ハルの足跡をもとに辿ることにある。

高木ハル（以下、ハルと称す）は明治3年生まれ、尼崎藩櫻井忠興に仕えた父をもつ士族の娘である。11歳のときに父が肺結核にて逝去、不本意ながら家計の苦しさゆえに学問を許されず尼寺に奉公した。姉婿より日本赤十字社京都支部で看護婦募集の情報を得て、試験を受けて合格し、家族の反対を押し切り東京に向かった。

日本赤十字社は明治23年4月に看護婦養成を開始、その半年後の10月の第2回生入学を機に、全国的に看護婦養成を展開するための布石として支部選出看護婦を採用することにした。京都、広島、愛媛の3支部がこれに応じ、京都支部からはハル他1名が試験を経て選出された。

本部の卒業生については1カ年半の学業期間ののち2カ年の実務練習が課されたが、支部の卒業生は支部の希望により、本社での実務練習は半年であり、その後は地方に戻って実務に携わり研鑽を積むことが期待された。ハルらが京都に帰った25年の時点では、まだ支部の看護婦養成は未着手であった。しばらくして紹介された私立病院に勤めたが、本社病院との医療の差に失望して退職した。明治26年3月末に京都支部より篤志看護婦人会の講習補助の嘱託状を受けた。

明治26年11月によりやく京都支部の看護婦養成が開始され、助教として教育に携わったと考えられるが、まもなく日清戦争が勃発、明治27年8月6日本社からの派遣要請により広島陸軍予備病院に派遣された。ハルの所属する京都支部の救護班は主に伝染病患者を収容する第三分院の担当となり、ハルは京都支部救護班の看護婦副取締として活躍した。日清戦争では大本営参謀会議の議決により看護婦の海外派遣は行わない方針であったが、ハルは広島、愛媛の支部選出看護婦と共に渡清を希望、「婦女子としては珍しき気概」と誌上で紹介され、支部選出看護婦の名を知らしめた。

戦後の明治28年9月にはこの経験を活かし、有事のため普段から看護婦の技術を高め、精神を涵養する必要があるとして、支部卒業生と共に派出看護婦会「平安看護会」を設立し、翌年に京都支部監督下となった。

高木ハルはまもなく結婚して京都を去ったが、日露戦争では幼児を家に残して戦時救護に参加し、病院船で救護に尽力した。大正13年からは日赤看護婦同方会の役員となり、太平洋戦争中の晩年まで活動した（昭和18年永眠）。

日本赤十字社は全国規模での救護員養成の展開のため、支部選出看護婦の養成に邁進していた。支部選出看護婦は、全国の看護婦の模範となるべく大きな期待のもと育てられた。卒業後は、各支部の看護婦養成に関わる他、日清・日露戦争などで活躍するなどして、社会一般に看護婦の存在を知らしめた。また、現地の病院看護のレベルを高め、看護婦の活動の場を開拓するなどの役割を果たしたと考えられる。